

令和6年度 学校評価報告書【国立市立国立第三小学校】

学校教育目標	思いやりのある子、考え実行する子、健康でたくましい子	重点目標	思いやりのある子
--------	----------------------------	------	----------

学校教育目標	中期的目標	短期的目標	具体的な方策	評価指標	達成状況		分析	改善策	学校関係者評価
					中間評価	最終評価			
思いやりのある子	豊かな人間性や社会性を身に付ける	やさしい心、温かい心の育成	「あいさつすると気持ちよい」と実感できる指導を進める。「あいさつ運動」「教員による朝の受け入れ」「6年生と1年生の交流」等、学校全体の取組や各学級、学年で、工夫した指導、取組を進める。全校集会でも折に触れ状況をほめたり指導したりしていく。	すすんであいさつができる児童を80％以上にする。 A・・・80％以上 B・・・70％以上80％未満 C・・・70％未満	褒めて伸ばすという校長の教育方針の下、全校集会などであいさつについて毎回触れている。その結果、低学年を中心に自らあいさつできる児童が増えている。高学年がお手本になれるよう、さらに声をかけていく。	校内で先生や友達に自分からあいさつしている。A（83.5％） 地域の見守りの方に、すすんであいさつしている。B（79.7％） 学校に来られた方にあいさつしている。B（73.6％）	どの学年でも、学校内外でのあいさつの割合に大きな有意差が見られなくなってきた。全体的にあいさつの習慣化が定着しつつあることが分かる。一方で、特に校外ではあいさつをしていないことに気が付いていない状況もあることを考えると、今後も意識付けは必要であると考えられる。また、校内で友達や教員以外へのあいさつについてはどの学年も少し課題が見られるが前年度に比べると改善傾向にある。	全校集会などを通してあいさつへの意識付けやみんなであいさつを一緒にする気持ちよさなどを体感できる機会を設けてきた。この成果が出てきている様子がうかがえるため、次年度も引き続き行っていく。また、今年度教員に看護当番制度を導入し、休み時間を中心に校庭や校舎内の見回りを行っている。その際に積極的に教員からあいさつを行うよう心掛けることで教員からもあいさつする習慣をしっかりと示せるようにしていく。	・本日来校した際、数名の児童とすれ違った。声を出してまでには至らなかったが、言おうとしていてと感じた。目を見て会釈も挨拶だと感じている。更に後もう一步頑張れるとよい。 ・サッカーアカデミーでの様子は、低学年の児童はまだ恥ずかしさがみられるが、昨年に比べて挨拶が返ってくるが多いと感じる。 ・8割を超える児童から挨拶が返ってくるのはすばらしい。看護当番制の取組で特定の教員ではなく学校として毎朝校門挨拶をすることで、誰に対しても挨拶できる習慣が身に付くことにつながっているので、引き続き取り組んでほしい。 ・「ほめて伸ばす」を今後も継続することが、児童の自己肯定感を育むことにつながると思う。来年度も「ほめて伸ばす」を推進していったほしい。
		自己肯定感・自尊感情の向上	教師が児童のよさを認めることを基本とした指導を行う。特に、「負の部分」を正すよりも、「自慢の部分」や「努力の部分」を伸ばす。また、Q-Uで学級集団をアセスメントし、より適切な支援を心がけたり、道徳授業を充実させたりする。	児童アンケート及びQ-Uの結果から学級集団の状況を分析し、学校生活満足度結果とその推移をもとに評価する。 【学校生活満足度結果】 A・・・60％以上 B・・・50％以上60％未満 C・・・50％未満	1学期に行ったQ-Uの結果から、分析分析会議を行い、学級指導に生かしている。学校生活満足度が低い児童には個別のアプローチを行っている。また、高めの児童にも目を配るようにしている。	10月実施の第二回Q-Uの結果では、学校内に自分の居場所があり、学校生活を意欲的に送っている児童が全体でA（61％）となった。5月実施の第一回Q-Uの結果では全体でB（57.8％）であったことから、Q-Uの結果をもとに教員で研修を行い、学級指導に生かせるようにした成果が出ている。	毎年、学級編成替えがあるため、新年度が始まると学級への帰属意識や自分の居場所を確立できず不安になる傾向が少なからずみられる。Q-Uの結果から、自己肯定感の低い児童や他者とのトラブル化した。担任以外にも共有することができ、教職員全体で見守れて、成果に表れていると考えている。	学年によって、学校生活満足度が10月の方が低くなっているところもある。学年の特性も関係していると考えられるが、より組織的な対策や構成的グループエンカウンターを定期的に取り組むようにしていきたい。また、次年度も校内研究では学級活動（学級会）に引き続き取り組む。自己肯定感を育めるよう、校内研とも連携して取り組んでいく。	
考え実行する子	を力基 身・礎 に判 断・断 力・基 本 的 な表 現力 、識 及 主 体 的 に学 ぶ思 考度	問題解決的な学習過程を重視した授業の推進による学習意欲の向上	授業を見合う、話し合うことで授業改善を行い、児童にとって分かりやすい授業づくり、友達と関わりながら自分の考えをより深める授業づくりを推進する。	学級会アンケートより ①自分の考えをすすんで表現している児童、②友達の考えについて自分の意見を伝えている児童の肯定意見 A・・・80％以上 B・・・60％以上80％未満 C・・・60％未満	授業を見合う環境づくりとして、教員の呼びかけや教室にリフレクションカードを置くなど工夫をしている。友達と関わる授業作りを意識して授業改善に取り組んでいる。	①自分の考えをすすんで表現している児童は全体67.9％でB。低学年66.3％、中学年77.3％、高学年60.2％であった。 ②友達の考えについて自分の考えを伝えている児童は、全体71.1％でB。低学年74.6％、中学年76.0％、高学年62.7％であった。	低学年、中学年では「自分の考えをもって学級会に参加している」の質問項目のポイントが上がったり、ポイント自体高かったりした。学級会の方法を理解し、自分を表現する場として考えるようになったと考えられる。高学年になるほどポイントが全体的に下がり気味であることは、学級会を通してよりよい学級づくりの方策を具体的に考えるようになり、自己評価が下がったと考えられる。自由記述でも低学年は「みんな」という言葉が増え、周りを意識するようになっている傾向がうかがえる。逆に苦手さに気付いた児童が高学年になるほど出てきたと分析している。	来年度は、学級活動の学級会だけでなくとどまらず、学級経営、教科学習を見合うことを通して、教員の授業改善、授業の質を高めていくことを重点課題として取り組む。そのために、まず友達との関わりを意識した授業改善を促し、研究推進部を中心に授業を見合う風土作りに努める。週案の活用や、リフレクションカードを手渡して授業を見合う方法をたくさん試していく。意見を発言していない児童が意見をもっていることを見取れる工夫や、意見をもつための工夫を提示し、実践していく。	・発言力のある児童だけでなく、皆の意見を取り入れられるのが良いと思う。 ・育成会の会議でもブレインストーミングを行っている。その際に絶対にしてはいけないのが否定することである。反対意見ではなく、心配と感じる課題を解決していくことはとても有効である。また、全員参加というものの良いと思う。朝の挨拶を通して、校長の「ほめて伸ばす」が学級会の中にも浸透してきていると感じられる。 ・リフレクションカードも有効に活用していったほしい。
		校内研究「よりよい人間関係の形成を目指した学級活動の充実」	学級会を通して、児童が自分から課題意識をもったり、自分の意見をもったり、主体的に関わり合うとする授業づくりを推進する。	学級会アンケートより 自分の考えをもって学級会に参加している児童の肯定意見 A・・・80％以上 B・・・60％以上80％未満 C・・・60％未満	自分の意見をもつための工夫としてタブレットの活用や掲示物の工夫を行い、研究授業や観察授業で全担任が学級会を行おうと計画している。	自分の考えをもって学級会に参加している児童は91.0％でA。 低学年88.7％、中学年93.2％、高学年91.1％。			
健康でたくましい子	にたく 付 け るま し く生 き るた め の健 康 や体 力 を身	すすんで丈夫な体をつくる	体力向上月間を委員会活動などを通して、児童主体の運動プロジェクトを行い、楽しく運動できる機会を与えていく。また、体力テストの結果では東京都の平均を下回る学年が多いため、体力テスト計測前に練習を行い、全校的、継続的に取り組む。	体力合計点の東京都平均値を上回る。 A・・・（平均値）以上 B・・・（平均値－1）以上（平均値）未満 C・・・（平均値－1）以下	体力テスト前にそれぞれの学級や学年で取り組み方の確認をして実施することができた。2学期以降、運動委員を中心に運動プロジェクトを実施していく。結果はまだ未定のため、届き次第集計する。	年間を通して、長縄旬間、持久走など体力向上の取組や、運動委員会プロジェクトなどを実施することができた。体力テスト計測前に練習を行うことができたが、まだ取り組み方への理解が不十分ではあった。	体力テストの結果としては、前年度と同程度の結果となった。全体的に体力の数値は低い。この理由としては、体の使い方や動かし方を十分に理解していないまま運動をしていることが考えられる。その時だけでなく、運動の場を校庭に設けて多様な動きをできるように環境を整える必要がある。	学年ごとに体育の学習の時間に、短縄の活動に取り組んでいる。学校全体で短縄週間として実施することができていないので、来年度は日程調整をして行うようにする。運動が苦手と感じている児童は一定数いる。その子たちが苦手だからやりたくないではなく、自分もやってみようとして思えるような環境や学習の場の設定をしていく。	・結果をもとに、体育部で分析し学校全体でどうすればいいか話し合っていければよいと思う。 ・具体的な数値を示すことも有効であると考える。 ・小学校では特に低・中学年時期の経験値はとても大切である。運動特性に合った遊びを取り入れることで数値は上がると考えられる。遊びからたくさんの運動経験をさせる必要がある。 ・運動が苦手な子は、強いられると学校に行くことがつらくなる。結果にとらわれることなく、楽しく運動できるとよいと思う。 ・体力の向上も大切だが、将来何か夢になってやることのできるきっかけづくりにつながる取組を行ってほしい。
		運動の日常化	児童の興味関心を引く体育科の授業づくりをすることや学級担任と一緒に体を動かすことで意欲的に運動に取り組む児童を育てる。また、体力向上月間を設けたり外遊びの啓発を行ったりすることで、運動する機会を与えていく。また、コーディネーショントレーニングを学期にひと単位、授業に組み込み、発達に合わせた運動の指導を各学級で行えるようにする。	1日60分以上運動する児童 A・・・95％以上 B・・・80％以上95％未満 C・・・70％以下	体育科の授業の充実のため、学年で指導前に単元の相談をしながら行っている。また、休み時間も教員と一緒に遊ぶことで、外で楽しく遊ぶことができる児童が多くなっている。 「オナ」(オナショナルトレーニング)と体づくり運動の単元を併せて実施している。	1日60分以上運動する児童は、Bとなった。体育科の授業改善をしたことで、児童の運動量が増え、主体的に取り組む様子が多くみられるようになっていく。高学年の数値が低くなってしまっていた。	体力テストのデータ分析を全学年で行っている。自分の数値をいつも見られることの良さにより、運動への意識を高めていくことができると考えられる。体力向上月間を設けたことで、長縄や持久走など主体的に取り組む児童が多くなった。目標を定めることで取り組める児童が多いことは三小の良さである。一方、高学年の児童が60分以上運動をしていないと答えていた。遊びのきっかけや環境をつくり、運動を日常化させることが喫緊の課題である。	中昼休みに体育館を開放して、校庭での遊び場を少しでも確保する。また、体育館開放によって、普段とは違う遊びを行い、動きの幅を増やすようにしていく。大谷選手のグローブ使用の時間を全校に設定したので、外遊びのきっかけとなるようにしていく。	